

いる。新生児期になると、責任の所在が医師と助産師の「どちらともいえない」という回答が9件で最も多くなっている。

図表7 正常な経過をたどる妊産婦のケアに関する責任の所在・程度 (n=21)

	【妊娠期】件数	【分娩期】件数	【産褥期】件数	【新生児期】件数
すべて助産師が独自で判断する	2	3	5	3
ほとんど助産師が独自で判断するが一部医師が判断する	4	13	12	7
どちらともいえない	2	3	3	9
ほとんど医師が判断するが、一部助産師に判断を任せる	11	2	1	2
すべて医師が独自で判断する	2	0	0	0
全体	21	21	21	21

このことから、診療所の助産師の妊産婦への関りは、分娩・産褥期に多いことが分かる。

診療所独自の取り組みについての記述には、以下のような内容があった。妊娠期には助産師外来や受け持ち制、分娩・産褥期には立会い出産やフリースタイルの分娩、また産後にも母乳外来や育児支援を行う等、妊産婦に幅広い関わりを持っていることがわかる。

【妊娠期】

○院内助産所

- ・院内助産所を開設している。

○助産師外来

- ・助産師外来（マザーケア外来）を実施している。
- ・妊婦健診は16週から助産師が行っている。完全予約制をとっており、一人一人にきめ細かい指導を行っている。
- ・産婦健診は、妊娠10週以後、助産婦健診の指導には時間を割いている。
- ・助産師外来では、妊娠期の基本的な保健指導以外に、12週では当院の特徴を説明し、お産、母乳育児に対する意識を持っていただくきっかけをつくる。その際、妊婦さんが抱えている問題（身体的、精神的、社会的等）を表出できるよう、プライバシーの守れる個室で行う。

○受け持ち制

- ・受け持ち制で当院の妊婦全員対象でオンコールをとっている。
- ・全妊婦に対し受けもち助産師（を決めている）。

○母親学級

- ・産前教室（母乳クラス、両親学級）
- ・月に8回の母親学級をしている。
- ・当院ではフリースタイル分娩と母乳育児をかかげて、外来での健診時の保健指導、MC（マザークラス）に力をいれている。

○マタニティ教室関連

- ・マタニティピクスを実施している。
- ・マタニティヨガ教室を実施している。

【分娩期】

○立会い出産

- ・夫（家族など）立ち会い出産（立ち会い率80%以上）帝王切開でも夫立ち会いを実施している

○フリースタイル

- ・分娩は、正常経過に関しては、フリースタイルで行っている。

○カンガルーケア

- ・生まれて直後のカンガルー抱っこ。

○その他

- ・陣痛開始からずっと産婦さんに付き添い、できるだけ赤ちゃんとお母さんの力を最大限に生かすような分娩介助をしている。（足浴、オイルマッサージ等施行）

【産褥期】

○産褥個別指導

- ・産褥については、母乳育児確立に向けて、分娩直後から授乳のタイミング、児の抱き方などを、一対一で指導する。完全母子同室も当院の特徴。

○母児同室

- ・ 母児同室
- ・ 終日母児同床で母乳育児支援をしている。

【退院後のかかわり】

○産後家庭訪問

- ・ 産後の家庭訪問

○産後の育児支援

- ・ 産後の育児支援（産後ヨガ、育児サークル毎週開催）の充実をはかっている。24 時間対応の電話相談、家庭訪問（希望者有料 2000 円）等がその内容である。
- ・ 退院後も母が自信を持って育児が行えるようになるまでフォロー（来院してもらったり、電話で対応している。）
- ・ 退院後も気になる産婦さんに対しては引き続きフォローしていく。母乳育児に対する援助、乳腺炎の治療など積極的に行なっている。
- ・ 退院後の母親学級集団指導、乳房マッサージ、乳腺炎処置等。
- ・ 産後1か月まで母乳育児支援クラス。育児相談、タッチケアクラス（小児科があるため）を実施している。
- ・ 退院後1才ぐらいまでの母子に対して、子育てサークルを援助している。
- ・ （出産した人に声を掛けて）年一回の同窓会を実施している。
- ・ 小児科併設のため育児相談も実施している。

○ベビーマッサージ等

- ・ ベビーマッサージ教室を開催している
- ・ ベビーピクスを実施している。

○母乳外来

- ・ 母乳外来、タッチケア
- ・ 母乳外来も開設。

○マタニティ教室関連

- ・ アフターピクスを実施している。

○性教育

- ・性教育を実施している。

○その他

- ・腰痛教室及び産後の腰痛緩和ケアを実施している。

④開業助産師や医療施設との勉強会や事例報告会、研修会への参加の有無

開業助産師や医療施設との勉強会や事例報告会、研修会への参加については、「ある」という回答が10件、「ない」という回答が11件であった。

ある施設については「定期的実施している」が1件、「不定期だが実施している」が8件である。

⑤勤務体制について

夜勤については「ない」という回答が1件、月に「1～2回」が1件、「3～4回」が9件、「5回以上」が10件となっている。

週休体制については「週休2日」が16件、「その他」として「4週7日」「隔週2日」「月20日勤務」という回答があった。

待遇については「妥当」という回答が23件、「良い」という回答が10件である。

⑥診療所に就業することについて

診療所に就業して、助産ケアに対する考え方や行動の変化があったかについては「あり」という回答が24件である。その内容としては、以下のようなものがあげられていた。

○助産師中心のケア

- ・積極的に自分の意見など言える場が出来た。
- ・助産師の本質に沿った判断ができる。助産所の開業前の準備としては役立つ。
- ・医療としての介入が最小限で、助産師として業務の幅が広がった。
- ・自己で判断し責任をもって行動するようになった。人まかせにしなくなった。勤務が終わったら交替するとかでなく、お産はオンコール受けもち制

なので最後までみている。

- ・以前、大学病院に勤務していた時は、医師の管理下でケアすることが多く、分娩に主体的にかかわりにくかったが、今は正常分娩であれば助産所に近い状態で主体的にかかわっていける。
- ・受け持ち制、助産師外来などは、病院では実施は難しいが、診療所はできる。
- ・正常範囲であれば、助産師の判断で行為することが増え、女性として妊産婦さん達にどうしてあげたいのか、どうすべきなのか、積極的にある程度自由に考え取り組んでいける。
- ・地域に密着した医療の重要性を時代の要請に応じたサービス、ケアなどの取り込みの必要性を感じ、助産師外来、ヨガなどを実施し始めた。

○診療所から学ぶこと

- ・妊産婦の全経過に関わることができ学ぶことが多い。産む人の気持ちに沿える方法を考えられる。正常分娩の考察ができ、助産診断の力量が上がる。
- ・バースプラン、フリースタイル分娩母乳のみの育児、カンガルーケアなどたくさん学んだ。

○妊産婦との関わり方

- ・産婦との付き合い方が、じっくりと付き合えるので、一人の人間をしっかりフォローできると感じながら仕事をしている。
- ・病院より産婦さんに関わる時間が多く、ゆっくりとケアしやすい。
- ・大病院で勤務した中で見えなかったことがわかり、助産婦としていかに判断し、ケアを充実させてゆくかが根本的に変化した。
- ・産婦さんへの分娩時のサポート、母乳育児に対する考え方（が変化した）。
- ・母子を一对のものと考え、夫婦の在り方等も指導していく必要を感じている。
- ・病院にはできない業務の改善や動きやすさ。より自然に分娩、育児をとらえられるようになりました。
- ・以前より産婦さんのそばにいるようになった。妊婦さんとのかかわりが多

いため、入院時に親しみをもったコミュニケーションがとりやすい。

- ・診療所（当院）でしか勤務をしたことがないので他施設とは比較しにくい
が、スタッフと妊産褥婦が妊娠、出産、育児と継続してかかわれているの
で、家庭的で親しみやすいように思う。

○病院は管理的

- ・今までの仕事が、いかに管理中心であったかを思い知らされた。
- ・病院勤務していたときに、患者にも規制が多く、治療目的での入院生活も
多くのストレスを与えていた。生体へのストレスがいかに疾患を作るか、
何となく理解できる。
- ・病院規模だと、どうしても業務遂行、優先が表立ってしまう傾向にあり、
個を尊重する余裕がなくなってしまうと思った。“ケア”という視点を重
視し、行ってゆこうと思うなら、病院では限界があると思う。

○その他

- ・社会的背景にも目を向けられるようになった。

⑦診療所を知ったきっかけ

当該診療所を知ったきっかけとしては、以前の職場等で現診療所の医師や助産師と
直接に接する機会があったという記述や、院長を講演会等で知ったという記述があっ
た。ナースバンクやハローワークという記述もあったが、多くはない。

○イベント

- ・院長と師長、主任が助産学科の講師だった。いいお産のイベントで話をす
る機会があった。それで転職を考えた。

○院長の講演等

- ・院長の講演、出版本を読んで、テレビを見て。
- ・院長の講演、本。

○近所

- ・自宅に近い
- ・近医に勤めていた。ラマーズ法で保健指導が充実していた。

○口コミ、近所の評判

- ・近所の評判
- ・口コミ

○当院医師と知り合い

- ・内科の医師と前職場で一緒だったため。
- ・以前の病院で医師と一緒に仕事をしていて、手伝って欲しいと言われた。
- ・院長の開業にあたり、声をかけて頂いたため、開業時より参加。安全な環境のもとでの自然分娩という理念に基づき助産婦としてのやりがい十分果たせると思った。
- ・開院前に現理事長の誘いを受けた。

○当院スタッフによる誘い

- ・この地域に転入し、新生児訪問等行っていたときに、助産師として働かないかと声をかけられた。地域の事を知るためには、お産をした方たちの話を聞くのが一番と思い訪問し、当院の行っている医療が良かったので誘いを受けたときにOKした。
- ・当院初代助産師の勧め。
- ・前の病院で一緒に働いていた友人が当院に入り、誘ってくれたため。
- ・当院勤務の助産師の知人から誘われた。
- ・他の病院から紹介された。

○友人の勧め

- ・友人にすすめられて
- ・友人の紹介

○学校での勧め

- ・自然分娩、母乳育児を推進している所を探していたところ、母校の看護学校の先生にすすめられた。
- ・当院で働いていたスタッフより話を聞き、看護大学の助産師学生さんが実習を通して良いと感じていたので（就業を決めた）。

○実習先等

- ・実習を本院で経験した。
- ・学生時代アルバイトをしていた。

○雑誌

- ・雑誌「ペリネイタルケア」
- ・「ペリネイタルケア」に載っていた。
- ・リクルート雑誌
- ・文献、雑誌等
- ・文献等

○ホームページ

- ・ホームページ
- ・インターネットの書込みを見て

○助産師会

- ・助産師会より知りました。

○助産師による紹介

- ・助産師の紹介

○看護協会

- ・看護協会での再就職の講習を受けていた時に出ていた求人案内を見て。

○ナースバンク事業（都道府県ナースセンター事業）

○ハローワーク等

- ・ハローワーク
- ・駅の看板

⑧当該診療所のメリット

メリットとしては、以下のような内容があげられていた。医師との関係の面では、信頼できる医師の間で信頼関係を築き、話し合いながら、新しいことに取り組めるといふ利点があげられていた。また、妊産婦との関係でみると、妊産婦へゆっくりと関わられる、妊娠期から産後までトータルに関わられるといった内容の記述が多い。

○医師との信頼関係

- ・院長が助産師の意見を聞き、取り入れてくれるので働きやすい。大病院の一人として働くより、自分を生かしていけると感じている。患者との接点も多く、充実した看護ができています。
- ・良いと思われる事は、前向きに取り組ませてくれる院長の下で働けること。助産師への信頼感を感じながら業務遂行できること。診療所の限界を見極め、母体搬送などすみやかに他医と連携が取れること。現在の分娩件数が看護サービス面で最も効率よく提供できると考えられること（400件前後／年）。
- ・組織が小さいので患者にとって良いこと、やりたいことが医師と相談して比較的自由にできる。
- ・医師とスタッフの信頼関係が強い。
- ・あらゆる規制がなく、望むことを聞き入れてくれる。
- ・主体的に分娩介助が出来る。よりよいと思われるケアは、医師との話し合いの上、どんどん取り入れることが出来る。
- ・手術（帝切のみ）ドクター3名の立ち会いあり、ドクターとの風通しよく、仕事がやりやすい
- ・正常経過をとっている妊産婦においては、ほとんど助産師の判断で自由に指導処置が行なえる。（院長が助産師を信頼している）院長と助産師またその他のスタッフ間の関係がうまくいっているので働きやすい。
- ・分娩や母乳育児に対して医師の理解もあり、助産師の判断でかかわられている。
- ・正常出産は助産師が任せてもらえる。各自研修を受けて良いと思われるケアは皆で共有協力して実践させてもらえる。
- ・ケアについて統一をはかりやすい。医師が助産師の業務を理解し尊重して

くれる。

○学習の機会

- ・アロマセラピーの使用、アクティブバース、フリースタイルの分娩など患者様の状態により色々ためし、分娩経過をみていくことができる。不妊、分娩、乳房など勉強会研修費を診療所で負担してもらえ、皆での勉強会があるのでいろいろ学習できる。
- ・本人希望の研修会参加を業務の一環として扱い、積極的にすすめている。
- ・分娩検討会をして振り返りスタッフと一緒に勉強会ができること。
- ・分娩台にこだわらずフリースタイル出産が可能
- ・母乳育児、フリースタイル分娩について学べること

○ケアの充実

- ・きめ細かくゆったりしたケアができる。個別ケアが充実、家族とのかかわりが十分できる。母乳育児支援が個別的にでき、母乳育児をおしつけることがなく、結果的に母乳育児の人が多くなっている。
- ・ゆとりを持ってケアができる。個別ケア（家族を含めた）ができる。先生との信頼関係、指導が密になり働きやすい。入院患者が少なく、ゆったりしている。
- ・分娩介助は、産婦さんにゆっくり関わられる。母乳育児に熱心な病院なので、勉強できる。

○妊産婦中心

- ・妊産婦中心に考えられている。
- ・妊婦主体のお産が助産師中心でできる
- ・病院勤務の時には、病院のやり方に合わせてもらっていたという気がしましたが、当院ではお母さんと赤ちゃん主体のお産なので、助産師としてはやりがいがあります。

○妊産婦へのトータルな関わり

- ・妊娠中から産後まで、様々なところで関わりを持つ工夫、努力をしていると思う。

- ・大病院の分業化された業務とは違って、外来～分娩～産褥までケアできる。患者さんと密なかかわりが持てる。ケアでよいと思われる新しいことはすぐ導入できる。
- ・妊娠期の3回の助産師外来（12週、28週、36週）と、プライマリナーズとの面談（32週）から得られる情報により、入院前から対象の一面を全てではないが知ることが出来た上で、分娩、産褥と、一人の対象と深く、ゆっくり関わることが出来る。このことは、業務優先では見えてこない、母子関係の深み、“人”と関わることの意味、助産師の役割を考えさせてくれる。また、フリースタイル分娩、母乳育児から、母となる人、なった人が持つ力を目の当たりにできること、力を引き出すためのサポートの仕方を医師や先輩から学ぶことが出来る。
- ・妊婦、産婦、褥婦との関わりが多い（妊婦カウンセリング前中後期3回、マザークラス、ラマーズ教室、マタニティヨガ、産後ヨガ、育児サークルなど）
- ・小児科があり、出産後継続してサポートできる。多くの症例があり勉強になる。
- ・妊娠中から産後まで妊産褥婦に関われること。
- ・初期の妊婦から受けもち、お産、産後を通してみられること。
- ・妊娠から分娩、その後の育児まで一貫してみることで、分娩を正しく把握し考えることができる。
- ・妊産褥婦さんと1対1でじっくり向き合えることで、画一的な看護ではなく、その人その人に合った看護を提供することができるのではないかと思っている。

○分娩が多い

- ・分娩に多く関わる事ができる。
- ・出産数が多いので、技術取得ができる。基本的に助産師主体で業務しているところ。

○自然分娩

- ・究極の自然分娩を知る。分娩を通しての人生、命の深さを知る。

- ・健全な心身の体をつくっていれば、ほとんどが待てば生まれてくる自然分娩を行っていること。助産所で助産婦だけでは出来ない自然なお産を追求できる。

○職場環境

- ・託児所があって子供が小さなときはとても助かった。スタッフが協力的で働きやすいと思う。
- ・多少の融通が利く（家庭との両立がしやすい）。
- ・通勤が近くて楽。子育てとの両立ができやすい。
- ・職員間の人間関係がスムーズであり、ゆとりある業務ができることが患者にプラス効果をもたらしている。
- ・家庭的雰囲気の中で仕事できる。
- ・人間関係の円滑なこと。母性を大切に看護できること。仕事の充実感と達成感のあること。
- ・本人の希望を最大限考慮して勤務を行なっているため家庭と両立しやすい。
- ・子育て中ということで配慮してもらっている。（夜勤等勤務体制）自宅から近いので通勤が便利。

一方、他施設と比較して、デメリットとして考えられる点としては、スタッフ不足、待遇のほか、対応できるケースの限界等、以下のような記述があった。

○人員不足

- ・スタッフの休みが多く、時間で仕事に追われる。
- ・スタッフ（助産師）が少ないため夜間呼び出されたりすること

○待遇

- ・給料が、公立病院に比べ低い。
- ・保障に関して
- ・給与面、産休、育休、病休などの保障。
- ・代休が取りにくい（有休も）。

- ・健康管理必要（勤務者少ないため）。
- ・産前、産後休暇が取れ、職場復帰ができるといい。

○新人教育

- ・新人教育を充分に行なうシステムが確立できていない。

○対応できるケースの限界

- ・診療所であり、検査データが扱えない物があり、判断に困難を来たしたことがある。医療内容の対応できる限界があり、搬送の必要性がある場合がある。
- ・帝王切開に対応できない。
- ・母児とも異常がおこった時、総合病院だったら治療看護ができる。当院は専門病院へ送るので最後までしっかり看護できない。
- ・新生児や産褥婦の異常時の対応に問題がある。
- ・異常が発生した場合、病院ならすぐに連絡し連携もスムーズかと思いますが、受け入れ先を探すことから始めるので少し時間がかかる。

○設備

- ・特にないが、あえて言えば、妊婦教室などできる広いホールがあればよい。
- ・施設の充実度

○その他

- ・前回帝切者が経膈希望で年 50 くらいあり、管理が大変。
- ・助産所ほどはアットホームではない気がする。

⑨その他、診療所の取り組み、助産師活動等に関する意見

その他、診療所の業務の充実感や医師との信頼関係について、多くの意見があった。

【診療所の業務の充実感】

- ・助産師外来、受け持ち制、母親教育と、大変な時もあるが満足感と充実感がある。診療所にこそ助産師の働く場があるように思う。
- ・院長の考え方で、病院の経営方針もかなり変わってくると思う。私たち助産師と医師の間の信頼関係がきちんとできていれば、今私たちが取り組んで

いろいろな事も問題なく出来る。診療所の院長は助産師を信じ、有効に上手に使って欲しいと思う。私たちもゼロからの出発でしたが、助産師外来（B スコープ操作含む）、ソフロロジー分娩、夫立ち会い、カンガルーケア、母児同室など、助産師としてやりがいを感じるころまで軌道に載せることが出来ました。「診療所でもやる気になれば大概のことは出来る」から「診療所だからここまで出来る」。

- ・患者様に必要と思われる看護の提供を多くの助産師が関わりを持ち、病院では出来ないことも出来ていると思うが、最近の患者様が病院を選ぶ条件が医療とは異なる面を重視している。そのようなところには助産行為を准看護師、看護師がたずさわっていることなど患者は知らない。何が大事かをもっとアピールすることが大切。
- ・診療所でありながら、助産所のような雰囲気、ある程度任せてもらえる部分があるので、そこが魅力だと思う。
- ・診療所では業務の流れにゆとりがあると思う（基準看護ではないので記録が少ない）。そのため、妊産婦さんとの関わりが密にできる確率が高いと思う。ニーズを一番に考えて（安全の上に）その人が望む活動を提供しやすく、基本をふまえて自分の活動を反映しやすい（皆さんに同じ事を提供するのではなくニーズに沿った関わりや助産師個性に合わせた関わりができる）。育児支援、乳房ケア等得意分野の活用がなされているのではないかと考える。

【医師との関係】

- ・医師の体制や経営の厳しい中で、助産師の活用を積極的に行い、医師も体のコンディションを整え、産婦へのきめ細かいケアを業とする助産師がいる事は有効だと思う。妊産師に寄り添い、全過程を一つ一つ判断し、安心して安楽な出産に導く方法を学び、より高い助産診断が身につくのは診療所だと思う。そして、出産場面のみではなく、家族や地域の中でのかわりも学ぶことができ、働いている助産師にとっては魅力がある。緊急時にもすぐ医師がかかわってもらえるので、助産師も心の余裕ができ、医師の方をみて仕事をしなくて済むし、妊産婦を主体にした仕事ができ、助産師本来の仕事が何かを学ぶ機会になっている。いい医師（助産師は何をする人なのかを知っている医師）にめぐりあうことも大切である。

- ・自分達が良いと思うことは大体やらせてもらっているのととても働きやすい。勤務時間が長くなってしまい体力的に大変な時もある。ただ、それも産婦にとって見れば、一人の助産師が自分にずっとついていてくれるという安心感は得られているようなので、悪い面だけでなく、良い面でもある。
- ・当院は診療所の規模に比べて助産師数が多いこと、助産所ではないが、助産師が主体の分娩介助も行なっている状況である。このような状況の診療所が増えれば、診療所という規模で働こうという助産師も増えるのではないかと思う。
- ・大病院、診療所での病院としての役割はそれぞれ違う。その中で診療所での活動は助産師の意見も反映しやすいが、院長や医師の影響も大きいことは否めない。当院では助産師としての役割を尊重してもらえる分、日々やらなければならないことも多いため、一通りの業務に長けている助産師が求められる。そのため、就業後1~2年は日々壁にぶつかることも多いが、成長も大きい。

【待遇面について】

- ・スタッフの連携もいいので、頑張っているが、給料面や休みなどを、もう少し、公的病院等と差をつけたい。
- ・もっと給与を上げて欲しい。
- ・当院では幸せなことに、産婦にかかわるスタッフが全て助産師であること、医師が自然分娩を誰よりも提唱していることで、助産師の取組に全く不自由はありません。しかし、自然を取り組むことは経済的困難を伴うことが多いようです。その辺りが解決されない限り診療所における本当の母児のケアはなし得ないと思われまます。

【経営者の考えが重要とする意見】

- ・病院勤務の時には色々な規制があつて、やりたいこともすぐ実行に移すことは出来なかったが、当院では診療所とはいえ、助産師が大勢いるので、話し合いながらすすめてゆけるのでありがたいと思う。
- ・診療所で助産師として働く上で、トップである医師の理解と、前向きな取り組み、考えがあれば、大変働きやすいと思う。

- ・院長＝経営者の状態ではあるが、衛生材料や器材に対しても安全や感染予防を第一に選択できているので働きやすい。医師のいる助産所に近い医院としてスタッフが協力しあっているので、現状はとてもスムーズな職場環境にあると思う。
- ・診療所においては経営者（医師）の考え方で待遇やケア内容が左右されやすい。当院は比較的助産師の考えを尊重してもらっているが、他院（近隣）の情報を聞くと、とんでもないと思えることを平気で行なっている施設もある。助産師がもっと本来の業務を自信をもって行なうよう環境を整えて欲しい。その変革で世の中も将来的に良い方向に変化していくきっかけのひとつになると思う。
- ・医師の方針と自分がやりたい事、方向性が合わないと、いくら待遇が良くても満足感は得られないと思う。

【その他、診療所での取り組み等】

- ・病院（公立）のイメージでは、一律のニーズ提供でその個々にあったニーズは発揮しにくいと思う。
- ・全例受けもち制。妊婦をトータルで知ることによって出産の経過が正しく把握でき、より正常な分娩経過をたどるであろうと考えている。妊娠分娩を一環して把握し、サポートし、結果まで正しく知ることと反省と前進をくりかえすことにより、助産師の実力も上がるであろうと考えている。
- ・妊娠中から助産師外来、マタニティクラス、マタニティヨガ等で妊婦とかかわれることで、お産、育児に対する思いが聞け、それぞれに合わせたケアができるようになった。お産もフリースタイル分娩をはじめてからは姿勢を固定（仰臥位）していたころより、お産に対する満足感が大きくなったように思う。（産婦もかわる助産師も）何よりも医師の理解が大きい。フリースタイル分娩をはじめてから分娩の異常も減ったので医師も助産師の判断をある程度認めてくれている。
- ・分娩時の責任の重さを感じる。
- ・私の就職した時は、分娩数が250程度だったので、ほとんど全ての方とかかわりが持っていたのですが、現在は倍以上になり、外来でのかかわり（マザークラス（MC）も含めて）がなく、分娩時あるいは産後に初めてお会

いすることもあるので、指導の難しさも感じている。助産師が多くなったのでBFHはいただいたが、内容の維持（母乳率90%以上等）も少しむずかしさを感じている。今後の課題である。

- ・今後、地域との連携を考えていきたい。特に助産師、ドクター、専門家の間で。
- ・私達は自然分娩、母乳育児をモットーに日々妊産褥婦さん達のお世話をさせて頂いている。しかしながら一歩外に出ると、サポートする私達医療者の考え方にまだまだバラツキがあり、お母さん方が困惑するような事が多いのも現状だと思います。赤ちゃんやお母さん達にとって、本当に大切な事は何か、必要な事は何かという事を、今一度真剣に考え、勉強会等を実施したり参加したりしていく必要があるのではないかと考える。

C-2 診療所インタビュー調査

全国の7診療所で訪問インタビュー調査を実施した。

(1) インタビュー調査の概要

①診療所の概要

診療所の概要は以下の通りである。

施設名	産科病床数	産科医数	助産師数	年間分娩数
A	14床	2名	13名(うち、1名休職)	約500
B	3床	1名	11名(全員非常勤)	約100
C	10床	1名	4名(常勤) 1名(非常勤)	228(平成15年)
D	17床	2名	12名	785(平成15年)
E	13床	2名	8名(常勤) 4名(非常勤)	約700
F	17床	1名	8名(常勤)	297(平成16)
G	11床	1名	12名(常勤) 6名(非常勤)	557(平成16年)

②各診療所の取り組みの概要

1) A診療所

A診療所は、病院から独立して診療所を開業した医師に同行してきた助産師たちにつづき、フリースタイルの分娩を勉強したいという助産師の口コミで応募してくる助産師たちが多く、ナースバンク、ホームページに情報を掲載しているが、それをきっかけに応募してくる人は少ない。

採用基準としては、助産師としての病院勤務3～4年だが、大病院で看護師としての経験しかない人も応募してくる場合もある。その場合には、基本的なことから教育している。

業務のうち、外来・問診は主に助産師が担当し、超音波・内診は医師が担当する。通常業務は基本的に助産師に任されているが、医師と助産師の間で情報は必ず共有し、助産師が気になった点は、必ず医師の指示を仰ぐことにしている。

助産師の教育については、師長に任されており、詳細な評価表を作成し、アセスメントを行っている。

当該診療所の勤続年数は通常4～5年である。助産師が行う業務は、分業化されている病院と比べてかなり多い。

助産師と看護師では母性の理解という、精神的な面で異なっており、医師は助産師がいることで安心して業務を行うことができる。ただし、助産師を採用する場合、看護師よりも給与が高いため、経営面で苦勞する面もある。

2) B 診療所

フリースタイルの分娩を実践し、分娩もほとんど助産師が実施。6年ほど前からカンガルーケアを実施したが、マタニティブルーになる人がおり、妊娠中から産後まで、より助産師の関わりが求められると考えるようになった。

助産師は全てパートタイム勤務で、日勤、準夜勤、夜勤のシフトで勤務している。勤務状況はタイムカードで管理し、時給で支払っている。以前、1名常勤の助産師がいたが、雑用が集中してしまい、上手くいかなかった。そのため、常勤での希望があると3か月ほど様子を見てもらうようにしている。

助産師は近隣に住んでいる人が多く、自転車か徒歩で通勤してくる。診療所に勤務する助産師の動機は、子育て中で、柔軟に働きたいという理由や、病院勤務に移行するまでのつなぎ等である。当院での勤務のほか、他で勤務している人もいる。

募集は、以前はナースバンクに出したこともあるが、上手くいかず、現在は直接診療所に電話してきて応募して来たり、助産所からの紹介で来る人が多い。多くの助産師は3年程度で退職していく。当院でのやり方を他で広めてくれればよいというのが、院長の考えである。助産師に多くを任せることで、医師はリスクの高い妊婦の診療に時間を割ける。

3) C 診療所

外来は助産師が実施しており、1人に30分ほどかけて丁寧に診ている。何か異常があった際には、医師が見ている。出産時に医師は立ち会うが、助産師に任せている。産後のケアまで継続的な関わりを大切にしている。助産師は、指名制としている。

開院当初は、大学の職員等の紹介でくる助産師が多かったが、現在は助産師同士の口コミで応募してくる助産師が多い。

常勤の助産師の一人は大卒後に、当該診療所に就職した。大学時代は休暇中にアルバイトに来ており、現在ではスムーズな仕事ぶりとなっている。

診療所に助産師が勤務してもらうためには、環境づくりが重要である。拘束時間を短くすることや週休2日制にすること、給与体系も明確にする必要がある。

医師との情報共有の意味では、年3回程度医師と助産師で意見交換をおこなったり、症例検討会を行っている。

4) D 診療所

フリースタイルの分娩を実施し、分娩はほとんど助産師が実施している診療所独自の「お産の10か条」を示し、妊産婦のバースプランの実施をしている。

助産師外来を開き、妊娠中のケアを実施し、1人につき30分ほどかけてていねいにみている。分娩時の負担を少なくするため、ヨガクラスやマタニティエクササイズも月2回行っている。

助産師の就職は、卒後3年以上、大学病院等で勤めたのち、就業している。口コミで入ってきており、就業希望者が空きをまっている状態である。

医療介入を最小限にしている診療所では、助産師がいることで上手く行っている。逆に助産師を要らないという診療所に無理にアプローチする必要はないのではないかと。

5) E 診療所

フリースタイルの分娩を実施し、分娩もほとんど助産師が実施している。助産師外来も実施している。その他院内活動として、マタニティクラス、ファミリークラス、ベビーマッサージを行っている。

開設当初から、順次就業希望者を就職させており、募集で困ったことはない。就業当初の助産師には、先輩が教えていくようにしている。

6) F 診療所

「もともとあった日本の伝統的なお産」を重視している。勤務している助産師は、自然分娩の取り組みを知り、応募してきた助産師である。もともと近郊の出身者は少なく、全国から当院で勤務するために移動してきている。

業務のほとんどが助産師中心でやっている。妊娠・出産というものの本質を考えると、助産師が主役であるべきで、医師はその手伝いをする役割である。